

最幸の人生の終い方

羽曳野市立峰塚中学校 二年 福田 祥己ふくだ よしき

半年ほど前、僕の祖父の肺にガンが見つかった。発覚時、そのガンはまだ手術によって切除できると言われ、僕も母も、祖父は当然手術を受けてくれるものと思っていた。だが、祖父は手術を拒否した。それどころか、ガンに対するすべての治療をせず、無治療で行くという選択をした。「せっかく手術ができるのにしないなんて！」と母は残念がったが、「最期くらい好きなことをして、尊厳をもって迎えたい」という祖父の気持ちをも、結局は受け入れた。

「尊厳死」と「安楽死」という言葉がある。人間である以上、いつかは必ず死を迎えることになるが、必ずしも自分が望んだ形で死ぬことができるとは限らない。この二つの言葉は、何となく似ているが、実は全く違う。「尊厳死」には自分の意志が反映されている。重い病気になって、治療を受けてもその先に死が待っていることが分かった場合、積極的に治療を受けるのか受けしないのか。意識がなくなった後、延命治療を受けるのか受けしないのか。自分で決めて周囲に意志表示ができるのだ。死に対してポジティブなイメージがある。一方、「安楽死」は、もう助かる見込みのない人に、これ以上の苦痛から解放するために施すものだ。「安楽死」にも色々あって、延命治療を行わずに自然に死を迎える「消極的安楽死」は「尊厳死」に近い形だが、自分の意志が反映されていないという点でネガティブな印象だ。

僕の祖母は、四年前に祖父と同じガンで亡くなった。祖母の場合は、発覚した時すでに末期だったので、手術もできず、抗ガン剤でガンを小さくし、少しでも長く生きられるようにするしかないと宣告された。抗ガン

剤を断れば、命の期限は半分になってしまふ。もうそこに祖母の意思が入る余地はなかった。抗ガン剤を使わなければ生きられないのならと、半ば押し切られる形で祖母は治療をスタートした。抗ガン剤は、多少の効果をおいてくれたが、それ以上に祖母の体力と気力を奪った。ガーデニングが趣味だった祖母は、暑い日も寒い日も庭仕事をかかさなかった。ところが、薬の副作用のせいで体力を落として、一人では歩けなくなった。そして庭に出ることもできなくなった。生きがいを失った祖母はほとんど口も利かなくなり、そこからは坂を転がり落ちるように悪くなった。「人権」という言葉をネットで調べてみると、「人間が人間らしく生きる権利」「すべての人々が生命と自由を確保し、それぞれの幸福を追求する権利」とある。祖母は最後、家族に看取られて静かに亡くなった。人として尊重され、大切にされる権利は行使されたが、最後の一年、祖母らしく幸福を追求できたかという疑問が残る。もしあの時、抗ガン剤をしていなければ半年しか生きられなかったかも知れないけど、大好きな庭で祖母らしく幸福を追求できたかも知れない。そんな心残りがあるからこそ、母は祖父の決断を受け入れたのだろう。

日本にはまだ「安楽死」や「尊厳死」を認める法律はない。「安楽死」では、患者の苦痛を取り除くために死期を早める「積極的安楽死」を選択した医師が殺人に問われた事例もあるし、自分の意志で死を決めるのだから、自殺も「尊厳死」と認めるべきだという意見もあるようだ。死に対する考え方は人それぞれ違うのだから、法律にして「こうです」と決めてしまうのは難しいのかもしれない。

ちなみに、無治療を選択した祖父は、今のところ大きな体調の変化もなく、元気に過ごしている。週末のたびに同窓会やカラオケなどの遊ぶ予定を入れてくる祖父を、母は「不良翁」と呼んであきれ顔だ。それでも僕は、そうできなかった祖母の分まで最幸の人生を満喫している祖父をたのしく思う。いつまでも元気でいてほしい。